

---

# **魔法先生ネギま！「英雄の息子と黄昏の姫御子の物語」**

剣聖

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法先生ネギま！「英雄の息子と黄昏の姫御子の物語」

### 【Zコード】

N1651M

### 【作者名】

剣聖

### 【あらすじ】

二人の出会いは必然。

誰かが決めた訳では無い、かといって本人達が決めた訳でも無い。ただ、結ばれていたのだろう。

俗に、運命の赤い糸と呼ばれる物に。

死んだと言われている世界を救つた英雄の息子と、滅びた古の王国にて黄昏の姫御子と呼ばれた少女の、物語が今、始まる。

## プロローグ・一人の出会いはこんな感じ（前書き）

この作品はアスネギ要素が中心になつて来ます。

だから所々ストーリーを飛ばしたり、ネギが変わったり（多少大人になつてます）します。

それでもいい方は、どうぞ。

## プロローグ・一人の出会いはこんな感じ

貴方に会つたのは、風が吹く、まだ少し寒い時。

遅刻しないよう全力で走っていた僕の耳に、貴方の声が偶然聞こえた。

その時、僕が貴方に話しかけたのも、偶然でした。

恐らく、これも運命だったと思うんです。

魔法先生ネギま！「英雄の息子と黄昏の姫御子の物語」

プロローグ・一人の出会いはこんな感じ

麻帆良学園の登校風景は凄まじい。

電車を降りて様々な手段を使い、地鳴りを上げ学校へと向かうその光景は、まるで戦場だ。

そんな光景の中に、女子が一人。

オレンジ色の髪を、鈴のついたリボンでツインテールにしている少女は叫ぶ。

「あーもおー！遅刻じゃない！」

「アスナが一度寝するのがわるいんやえー」

「わ、分かつてゐるわよー。」

もう一人の黒髪少女にビシッと突っ込まれ、彼女は呻いた。  
彼女の名前は神楽坂明日菜。

麻帆良学園女子中等部に所属する、中学一年生。オッドアイが特徴的である。

ちなみにもう一人は近衛木乃香。アスナのルームメイト兼、親友である。

「ああ、高畠先生に早く会いたい……」

「まあ、その前に新任教師さんのお迎えをしなきゃあかんけどなー」

好きな男性をイメージし、トリップしかけたアスナの精神をこのは一言で戻す。

恨めしそうにアスナはこのかの方を見た。

「なーんで学園長の孫娘のアンタが新任教師のお迎えまでやらなきゃなんないの……ハアー……」

長々とため息を吐くアスナに流石に不憫に思つたのか、このかは手元にあるマイ手帳を見ながら、

「まあまあ、今日は運命の出会いがありつて占いに書いてあるえ」

「えー、マジー。」

「このかの言葉に全力疾走しながらアスナが聞き返す。

「あー、でも新しい出会いについては高畠先生じゃないのー?」

「わうなるなー」

「ギャアーー? それはヤダーー。」

女子らしく無い叫び声を上げ、頭をブンブン振り回す。  
長いツインテールがブンブン振り回されたのと、叫び声で周りの視  
線を集めているが、本人気づかず。バカっこに極まり。

「あはは。まあ、占いやし。余り気にしそうにもしゃあないんやな  
いか?」

「占い研のアンタが言つていいの? それ……」

なんというか、占いに喧嘩売つてみるようなセリフを言つたこのかを  
呆れの田で見るアスナ。

「それにしても、アスナ足速こよねー。つかコレやの」

このかは自分の足元を見た。

彼女は登校にローラースケートを使っている。

アスナはそのローラースケートを使っているのかに自分の足で並走していた。

はつきり言つて普通の女子はこんなこと出来ない。

「悪かったわね。体力バカで」

アスナがそう言つた瞬間、

フワッ

優しい風がアスナの背中側から吹いた。

「ん？」

アスナは風が吹いた、このかがいる右側とは反対の左側を見る。

そこにいたのは1人の少年だった。

歳は十歳程度だろうか？

赤い髪と黒い髪を持ち、瞳は茶色の外国人だと一発で分かる。  
その小さな背中には似合わない大量の荷物を背負い、何やら長い棒  
のような物もある。

少年はアスナの方を見ていた。

そして口を開く。

「あの、すみません。麻帆良女子中等部にいる学園長さんに会いたいんですけど、どこにいるか知りませんか？」

「……はあ？」

アスナは訳がわからなかつた。

何故こんな場所にこんなガキがいるの？

彼女の彼に対する第一印象はそんな物だつた。

物語は始まる。

今ここに、一人は出会つた。

## プロローグ・一人の出会いはこんな感じ（後書き）

修正しながら投稿しているので少し時間がかかります。  
後アスネギは最高だと思つ。異論は認める。

## 第一話・やつて来たおナリサ先生、ネギー！

まあ、最初は驚いたけど。

だってガキよ？十歳のガキ。

普通驚くって。

しかもただの迷子には絶対に見えなかつたしなあ……

さて、愚痴はこれくらいにしておきますか。

魔法先生ネギま！「英雄の息子と黄昏の姫御子の物語」

第一話・やつて来たお子ちゃん先生、ネギ！

「はあ？ あんた何？」

アスナは立ち止まり、ジロリ、と少年を見る。  
ここは女子中等部玄関付近。

普通は男は教師しかいないし、子供もない。

つまり、田の前の少年は怪しそマックスなのだ。

だが、

「おじいちゃんに何か用事でもあるん?..」

「おじいちゃんって」とせ、お孫さんですか?」

ズテン!と見事にアスナはすっ転んだ。  
二人に不思議な物を見る目で見られながらも、アスナは頭を抑えながら起き上がる。

「いや、このが!その前になんでこんなガキがここにいるのか聞くべきでしょ!うが!..」

「むつ……」

「まあまあ、落ちつき。ほら、スーパー」

「え、え?スーパー……」

このかに釣られ、アスナは深呼吸。

息をしつかり吐き終わり、改めて少年を見る。

「で？なんでアンタみたいなガキがここにいんのよ？」

「またガキって……えっと」

アスナの言葉にムツとしながらも、少年が言おうとした所で、

「おーい、ネギ君！」

「えつ？」

「あつ！？」

その声が聞こえてきた校舎の方に三人は顔を向ける。  
校舎の一階窓から顔を除かせている男性は、高畠・T・タカミチ。  
スーツを着込み、眼鏡をかけているその姿はどう見ても教師だ。

「た、高畠先生！？」

「おはよー！」やこまーす」

アスナは慌てふためき、このかは笑顔で挨拶する。  
アスナも挨拶を、

「お、おはよー！」やこいま「久しぶりー・タカミチー」……えつ？」

出来なかつた。

というより、久しぶり？

思考がこんがらがったアスナに、更に爆弾発言が上よりやつて来る。

「麻帆良学園へよつゝん。いい所でしょ？ ネギ先生」

「ちよつとエックリしそうたけどね」

……はつ？What？先生？ティーチャー？

「え……？せ、先生て？」

天然にもほどがあるこのかでも、今の言葉が信じられなかつた。アスナなど、思考が完璧に停止し、強張つた顔で彼を見る。

彼ははい、と言つた後、一回ゴホンと咳払い。

彼は告げた。

「この度、この学校で英語の教師をすることになりました、ネギ・スプリングフィールドです。これから宜しくお願ひします」

そう言って頭を下げたネギの言葉を、頭の中で反復して、

「……え、ええええええええええッ！？」

麻帆良の空に、アスナの絶叫が響き渡った。

「ふむ、よく来たの。つと~どつしたのじゃ~頭を抑えて?..」

「いえ……」

学園長室、そこでネギは荷物を下ろし、スーツ姿で立っていた。  
ちなみに学園長の言う通りに頭を抑えてる。  
何故かというとタカラミチからネギが担任になると聞いたアスナが錯  
乱(?)しそ、ネギの頭を掴んで持ち上げたからだ。

一体どんな握力と腕力だ……

ネギは心中で呟く。

近くにアスナとこのかがいるため、呟けないといつのもあったが。  
長いヒゲを触りながら、学園長は言つ。

「なるほど、修行のために日本で学校の先生を……そりゃまた大変  
な課題をもひうたのー」

「は、はい。よろしくお願ひします」

修行といつ言葉に首を傾げる一人。だが声には出さず、ネギを見る。

「まずは教育実習とゆーとなるかの?」

「分かりました」

「ところでネギ君には彼女はあるのか? と一じゃなつりかの?」  
「ややわじこちゃん」

「チャン!」

余計な」とを言つた学園長の前頭部に金槌が衝突。やつたのはいつのまにか学園長の隣に移動したこのかだつた。

その光景にネギは内心恐怖してたりする。だつて、ねえ?  
そんな」とを考えているあいだに、アスナは抗議していた。

「ちょっと学園長先生...こんな子供が教師するだなんておかしいじ  
やないですか! しかもつらの担任だなんて!」

「ふおふおふお」

訴えを笑いで流す学園長。ちなみに頭からまぎヤグなよつて血が噴出中。

それを見てアスナは諦めです「すい」と下がる。

「はあ……なんだ」「んなチビッ」「が、つちの担任」……」

「アスナ。元氣だしーや」

「セイ、ネギ君。」の修行を恐らく大変じやぞ」

突然、学園長の纏う雰囲気が真面目な物へと変わった。  
それを感じ、アスナとこのかも背筋がピシッとなる。  
ネギは言わずもがな、だ。

「ダメだつたら故郷に帰らねばならん。一度とチャンスは無いが、  
その覚悟はあるのじやな？」

それは、十歳の子供に問う質問にしては、少しばかり重い。  
アスナ達は知らないが、ネギはこの修行に夢の全てが掛かっている。  
その夢のために、思いのために、ネギは血がにじむような努力を重  
ねてきた。

覚悟はとの間に出来てゐる。

「はい」

たつた一言だが、その言葉に含まれた重みと顔は、十歳にはとても不相応だった。

(「マイシ……」)

アスナはそれを見て、思わず顔を見つめてしまう。

アスナにとって子供というのは、ワガママで、自分勝手で、そのくせ一人じゃなにも出来なくて。そんな存在だ。

だが、目の前のネギは違う。  
他の子供とは明らかに違う。  
まるで精神だけ大人のようだった。

アスナはネギの顔を見ながらそう思った。

「やうそ、アスナちゃん、このか。ネギ君を暫くお前達の部屋に泊めてくれんかの？」

「ちよおー？」

なんで！？とアスナは心中で悲鳴を上げた。

「ふう、途轍もなく疲れたよ……」

時間飛んで放課後。  
広場にて袴はため息をはいていた。

あれから色々あり、あんたなんか泊めたくないわだの教室のトラッ

「僕、神楽坂さんに何かしたかな……」  
「だの消しゴム攻撃だの。  
正直言つてとても疲れる。

ちなみに何が原因かこのかさんにて聞いてみたら、「照れ隠しみたいなもの」と。

後、タカミチの授業じや無くなつたことによるイライラ、らしい。  
正直、先生になるだの担任になるだの、ネギが決めたことでは無い  
のだが。

「うう、でもなんとか仲良くなれ?」

ネギはふと、視界に何かが入つた。

見ると、本を大量に持つた女子が手すりの無い階段を歩いている。

「あんなに一杯本を持つて……」

ネギは嫌な予感がした。  
そして予感は的中する。

ガクッと足を踏み外したのだ。

大量の本とともに彼女、富崎のどかは落卜する。  
高さは十三はある。

落ちたら痛いじゃすまない。

「へー風よー。」

ネギは立てかけてあつた杖を取り、のどかが落ちそりこなっている場所に向かつて振るう。

フワツと風がのどかと本達を浮かせた。  
その僅かな間にネギは滑り込み、キヤツチ。

「ほつ。大丈夫ですか宮崎わ……」

言葉の途中でビダツーとネギは固まる。

何故なら、

「あ、アンタ……」

(ばれたーー?)

固まつて此方を凝視している姿を見れば一目瞭然。

(なんでようじにもよつて神楽坂さんーー?)

魔法使いの正体はバレ、

少年と少女の運命は深く絡み合つ。



## 第一話・やつて来たおナリサ先生、ネギー（後書き）

まだ原作と殆ど違いませんね。

本当に違つてくれるはエヴァンジエリン編からなので……

## 第一話・本当の魔法は・・・

アスナに魔法がバレた時ネギ君相当焦ったやろおなあー。  
アスナもポカーンとしどつたみたいやし。

だつて魔法少年、やもんなんー。

じゃ、続き始まるやえー。

魔法先生ネギま！「英雄の息子と黄昏の姫御子の物語」

## 第一話・本当の魔法は・・・

「あ、あの……その、これは……」

只今、魔法先生ラステルネギ（？）はピンチに陥っていた。  
一般人に魔法を見られてはいけない。  
これは魔法使いとしての代表的なルールだ。

\* ちなみに破つたらオゴジヨにさせられます。

ネギは言い訳が思いつかず、口<sup>ご</sup>もる。  
ふと、ネギの腕の中にいたのどかが動いた。

「うう……ネ、ネギ、先生……？」

その一言が切っ掛けとなつた。

固まっていたアスナは自慢の超スピードでネギを確保(ついでに杖も)。

そのまま抱えた状態で走り去る。その間、約八秒。

「え、えっと……？」

のどかはその走り去つてゆく背中を見て、状況について行けてなかつた。

ダンッ！と襟首を捕まれた状態でネギは木に押し付けられる。そこから尋問がスタート。

「ああああんたやつぱり超能力者だつたのねーっ！」

「い、いやちが」

「『』まかしたつてダメよ田撃したわよ現行犯よーーー！」

「あうひへつーーー！」

ネギ、『』まかせず。アスナに迫られ若干涙目になつてゐる。

「白状なさい！超能力者なのねーーー？」

「ボ、ボクは魔法使いで……」

「どつちだつて同じだよーーー！」

バツサリ一刀両断。

ネギはうつと呻き、杖を手に取つてアスナを見る。アスナはその視線に何かを感じ、後ずさつた。

「仕方無いですね……」

「な、なによ？」

杖を包んでいた包帯が何故か勝手にほどけ、杖の上部が露出する。その先端を、ネギはアスナに向けて、

「悪いですが、知られたからこな記憶を消させてもらいますー！」

「えっ、ちよー!?」

記憶を消すのにはいくつか理由がある。魔法使いの存在を公にしないためでもあり、危険に巻き込まないためでもある。

魔法は危険な物で、悪い人間もごまんと入る。この世界では、魔法の存在を知っているだけで危険な目にあいかねないのでだ。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル」

たがらネギは記憶を消す。

危険に誰かを晒すのはいやだからだ。

「時の精靈よ、こぞ来たらん。我に宿りて時を済しられ。水のい」と  
く、「夢のい」と「

魔法陣が杖の周りに展開され、振るわれる。

アスナの周りに帯のように出現し、空気に溶けたりつつも消えていった。

「……ふう、これで大丈夫かな」

「……？ あんた何してんの？」

「……へ？」

アスナが首を傾げながら言つたので、ネギはまさかと思いつつも聞いてみる。

「あのー……神楽坂さん。僕は何でしょ?」

「魔法使い」

！？

「は、はああー？ なんでー？ 術式は完璧だったのに……」

ネギは思わず叫び、もう一度魔法を発動する。

今度こそ……

だが、水色に光る帯は役割を果たさなかつた。

アスナは困惑わらず、マークを頭に浮かべ、ネギは絶賛混乱中。?

タカミチが来るまで、この状態だつた。

「で？ その魔法使いがなんで日本なんかで教師をすることになつてんのよ？」

夕暮れの光を浴びながら、アスナはネギに問いかけた。

あの後つまことタカミチをしまかし、逃げたのだ。

「えつと、修行のためです。立派な魔法使い（マギステル・マギ）になるための」

「……は？」

ネギから出て来た単語に首を傾げる。

「マギ? なにそれ?」

「え、えーと、立派な魔法使いの仕事は世のため人のために陰ながらその力（魔法）を使う、魔法界でも最も尊敬される立派な仕事の一つです」

ネギの説明を聞き、ほほうとアスナは頷く。魔法使いといつてもアニメで見るようなのは少し違うらしい。

「今はなんていうか、その、仮免期間のような物で……」

「ふーん。それで？ 魔法が人にバレたらビーンの？」

「か、仮免没収の上、強制的に連れ戻されます……ひどい時はオジョにされちゃって」

「あつ、そこは魔法少女っぽいのね」

ネギが涙目ながら言った言葉に、アスナは素直な感想を述べる。魔砲少女みたいな感じばかりでも無いらしい。

ネギは魔法少女？と思いながらも続ける。

「ですから、あの。他人にはこのことを黙つていて貰えないでしょ  
うか？」

「えー？」

アスナは不満そうにぶーたれる。  
ネギとしては自分の夢のためでもあるが、アスナ自身のためでもあ  
つた。  
魔法使いの存在を知っていることがバレると、誰かが記憶を消して  
来るかもしれない。

だが、ネギは恐らくその魔法使いじや消せないだろ？と思いつ。

先程の魔法は確かにきくはずだった。まるでレジストのように搔き  
消えたが、どうもおかしい。  
もしかすると、彼女はとんでも無い存在かも……  
へたすると、攫われたり……

「まあ、いいわ。アンタのおかげで本屋ちゃん助かった訳だし」

「あ、ありがとうございます。」

ネギはその言葉にとても感謝した。

場合によってはタカミチが学園長に話さないといけないだろ？から。

「それにしても魔法使いかあ……ほれ薬とか無いの?」

「無いです」

「使えないなあ」

「いや、ほれ薬とか何に使つんですかって、分かりきつますね…」

ネギはアスナがタカミチのことを好きだといつことを思いで出して、苦笑する。

荷物を取りに教室に戻りながら、一人は話し続けた。

「じゃ、お金のなる木は?」

「いや、言ひてる意味が分からないんですけど……」

「じゃ、読心術!」

「使えるナビしません!」

「えーヶチ」

「タカミチに読心術なんかしたら一発でバレます!」

そう言い合いながら、二人は教室の前に立つ。アスナが扉を掴み開け放つと、

「パーン！」

大きなクラッカーの音がいくつも鳴り響き、

「ようこそ？ネギ先生ーッ！？」

盛代な歓声が響いた。

教室の入り口に立つネギとアスナの近くにカラー テープや紙吹雪が落ちる。

「へ？」

「あ……そーだ。今日アンタの歓迎会するんだっだけ……忘れてた！」

「えええ！？」

アスナから告げられたサプライズに驚きを隠せなかつた。

「せりせい、主役は真ん中」

「あ、ありがと「ひ」やれこせや」

周りに急かされ、ネギは真ん中らへんの席へと座る。  
机のうえには大量のおかしと食事が。

「特製肉まん食つといシネ」

「ジュースもあるよー」

「あー、はー」

ネギがジュースを飲みながら周りを見ていくと、

「あ、あのー……ネギせんせー……」

「え……？あ、一十七番の図書委員、富崎さん」

「あのー、わたくしはそのー、危ない所を助けていただいてそのー、  
あのー」

ネギに向かつて何かを差し出し、それをネギは受け取る。

「これはお礼ですー、図書券……」

「えつー? い、いえその……」

「おおーー.」

「本屋がもう先生にアタックしてるぞーー!」

周りが面白そうにのどかを冷やかす。  
ソレを聞いたのどかは顔を赤くするが、

「センセ私が『コレを……記念です』

「ぶつー?」

その場にいたネギを含むほとんどの人間が吹き出した。

何故なら雪広あやかが自信満々に取り出したのはネギを象った銅像  
だからである。

仕事が早い。

「アンタばかじゃないのー?」

「なつ……アナタに言われたくないですわアスナさん!」

アスナの言った言葉にあやかが反論し、取つ組み合いの喧嘩がスタ

ート。

周囲もはやし立てヒートアップ。  
ネギが冷や汗を垂らしながら止めるか迷つてゐると、

「はつはつはつ。アスナ君はいつも元氣だねえ」

ピタッ！とアスナは石像のよつこに固まる。

そしてゆっくりゆっくと、声の発信源の方に首を向けた。

そこにいたのは爽やか笑顔を浮かべた高畠教員。

「……」

愛しの高畠先生に喧嘩の最中で乱れまくつた姿を見られたアスナは、白く燃え尽きた。

会も終わりに差し掛かつた頃、アスナは階段に座りため息を吐いていた。

その脳内ではネガティブ思考が渦巻く。

「ハア……」

「アスナさん、大丈夫ですか？」

「うわっ！？アンタいたの！？」

突然現れたネギに、アスナは体をびくらせて階段から飛び起きる。

「はい。アスナさんの姿が見当たらなかつたので」

ネギは笑いながら言つ。

アスナは踊り場に立つネギを見て再度ため息を吐いた。

「あのねえ、主役が会抜け出してビースンの」

「いえ、アスナさんの事が気になつたので……だ、大丈夫ですよ！  
タカミチはアスナさんの事好きだと思いますし！」

「それは先生としてでしょ……いいのよどうせ、ただの片思いだつ  
たし……」

目に涙をためながら、彼女は口を開く。

「それともなんか、アンタがしてくれるの？」

その視線を受け、ネギは少し間を開けて語り始めた。

「……確かにタカミチの気持ちは読心術を使つても完璧には分から  
ないし、惚れ薬も所詮偽りの感情でしかありません」

魔法っていうのは万能じゃないんですよね、と苦笑いしながらネギ  
は続ける。

「僕は思うんです。こんな時は、魔法に頼つてもだめなんだって。  
本当の魔法の力じゃないとダメだって」

「本当の……魔法……？」

「はい」

意味の分からぬ言葉に困惑アスナに、ネギは優しく言った。

「僕達の魔法は万能じゃない。僅かな勇気が、本当の魔法なんです」

背中側から太陽の光を受けながら、彼はそう笑顔で言った。  
思わずアスナが見とれてしまふくらいの、笑顔で。

「……な、何、真顔で言つてんのよ」

「あ……」

慌てて目をそらし、階段を降りる。

だけど、三段ほど降りた所で立ち止まり、不安気な顔をしていたネ

ギの方をぐるりと回す。

「分かったよ。私……勇気出す」

ツインテールがなびくその笑顔は、とても綺麗だった。  
それを見てネギはほつとした表情になる。

「一と、その前に告白の練習させてよ」

「……え？」

アスナの口から放たれた言葉に、ネギは思考が追いつかずマヌケな返事を出してしまった。

「練習もせずに告白なんかできないでしょ」

ネギの下の段に立ち、アスナはドンドン話しあを進める。

「あんた今から高畠先生ね」

「あ、は、はい」

スルツ

アスナはツインテールに縛っていた鈴つきのコボンをせざる。  
髪が下ろされ、アスナの背中に触れた。

ふう、と息を吐き、ネギを見つめて、

「好きです」

セツ、一言言った。

ネギの心臓がドキン…と高鳴る。

「ずっと前から……迷惑、でしたか？」

「あ、いえ、でも……」

ネギはちやんとした言葉が口から出せない。

頭の片隅でお姉ちゃんに似てるといつた？ 気な考えが展開されていく。

「やつぱりダメですよね、私なんか……」

悲しそうな顔をし、アスナはネギに背を向ける。  
ネギは思わず、

「そ、そんな」と……。」

ガシッとアスナの肩を掴んでいた。

当然足場が狭い階段で急にそんなことをすればバランスを崩す。

「あ

「……っと」

何とか倒れるのは免れたが、顔が急接近していった。

十センチも無い。

お互いの息が顔にかかる。

二人の鼓動はとてつもなく早くなっていた。

「……この先の練習も、いい？」

「えつ……」

ネギの頬にアスナの両手が優しく当たられる。

「田を……閉じて……」

顔を真っ赤にしながらも、ネギは田を開じる。  
そしてドンドンアスナの顔が、脣が接近し……

ムニコー！

ネギの頬が左右に引っ張られた。

「……え？？」

「ふ、ふふふふふ。ひつかつた」

「あうつー！？」

たまらなくなつたのか、爆笑が巻き起つる。

「あははははー！アンタ今キスされるかと思つたでしょーーー！」

「い、いやそのーーー！」

「まつたく、子供の癖におませさんねーーー！」

「う、うぐー！」

先程とは別の意味で真つ赤になつたネギの頬をムームーともて遊ぶ  
アスナ。

が、アスナは笑いすぎて気づかなかつた。

パシャパシャ！

「えつ？」

二人してその光が来た方向を見ると、そこにはカメラを構えた女子、  
朝倉が！

他にも数名、一人を信じられないという表情で見ていた。  
特に犯罪者予備軍のあやかさんが。

「ア、アスナさんあなた……」

「あ……」

「う……」

フルフル震えるその姿を見て、一人は改めてマズイ事態になつたと  
気がついた。

だが時すでに遅し。

「こここ、こんな小さい子を連れ出してアナタは一体何をやつてた  
んですかーっ！…」

「ち、ちがー！」

「何が違うのですかーー、こいつコトだけは絶対にしない片だ  
と思ってましたのに！」

「う、誤解よ委員長ー。」

アスナは必至で弁明するが、暴走している委員長は止まらない。

しかも周りもギャー、ギャー騒ぐものだから收拾がつかない。

「ほらあんた、じゃなくて先生からも何か言ってくださいよ。」

「え、うー？」

突然振られ、ネギは慌てる。

「言い訳は見苦しいですわアスナさん！」

「ノルマニー」

一 ほら先生早く！」

#十一

七〇九

ナガサキ

グルグル頭が混乱し始めたネギが取った行動は！

「ら、ラス・テル・マ・スキ「やめえい！」／ブツー？」

記憶除去の魔法を使いかけましたまる。

「はあ、ほんとこひびいていた……全部アンタのせいよ。」

「今のは自業自得だと「なんか言つた？」「すみません……」

はあと、ネギはため息をつく。

これから自分はやつていけるんだろうか。  
夜の道をアスナの隣を下を向きながら歩く。

「アスナー」

前方を歩いていたこのかが、アスナを呼ぶ。

「さて、帰らつか

「あ、はーつ」

「うひあんた泊まる所決まってたんだっけ?」

あつ、とネギは思い出す。

色々あつて忘れていたが彼は泊まる所が無いのだ。

「いえつ、その……」

「……いこよ、来てま」

「えつ?」

その言葉に驚く。

あれだけ嫌がっていたところに……

「……ま、やつきの言葉ちよつとぐれつと來たかな

ツインテールの方をクリクリしながら、彼女は言つ。

「い」のまま頑張れば、あんたもいつかはいい先生になれるかもね

「あ………ありがとうございますー。」

フンと前へと進むアスナ。  
そんな彼女を見ながら、ふとネギは名簿の存在を思い出し、開いて  
ペンで書き込む。

アスナの所に「いい人」「お姉ちゃんに似てる」と。

少し欠けた角を見ながら、ネギは心中で呟く。

「お姉ちゃん、アーニャ、おじいちゃん、スタンさん……父さん。  
色々不安もあるけど、立派な魔法使いになれるよつ、頑張りますー。」

「はーー！」

「何してんの行くよー」

ネギは走り出した。

少年の歩く道のつを。  
丹は照らす。

……私、ですか。一体どういう人選……

あの頃はネギ先生は不安だらけだったでしょう。  
その中でアスナさんは頼れるお姉さん代わりだったのかも知れません。

アスナさんの存在がネギ先生にとって、とても大切になったのはソレも理由の一つではないでしょうか？

さて、お嬢さまを待たせているので……

魔法先生ネギま! 「英雄の息子と黄昏の姫御子の物語」

### 第三話・居残り補習と魔法少年の夢

神楽坂アスナの朝は早い。

四時半に携帯のアラームが鳴り響き、アスナの意識を覚醒させる。アスナは目をすりながら携帯のアラームを止めた。

「ふあ……」

大きなあぐびを一つ。

そしてゆっくりと、ルームメイトを起さないよう一段ベットから降りる。

チラッと外を見るとまだ暗い。

「……みー」

アスナはパジャマを脱ぎ始める。

赤色のパジャマをあつと/or間に脱ぎ、ポイッと投げる。

上のパジャマは毛布の上に落ちた。

「……毛布？」

自分の思考に疑問を抱き、アスナは毛布を見る。

アスナは毛布を下に落としてないし、このかはぐるまつて寝ている。

そこまで考えて、

ガチャ！

「おはよー、ヤマコ……？」

さて、状況を説明しよう。

何故か入ってきた少年、ネギはタオルを肩にかけている。手には杖。魔法の練習でもしていたのかも知れない。

対するアスナは先程述べたようにパジャマを脱いでいる。短絡に言つと完璧な下着姿。

つまり、

「……」

「えっ？ ちょ！ なんか『ガガガ』って怒りの擬音が聞こえるんですけど！ ま、待つてください落ち着いて！ その振りかぶった拳を下ろしガボッ！ ？」

ネギは朝早くから早速氣絶と言ひ合の一度寝に以降した。

遅刻しないために走り続ける大量の生徒達の中で、少女の怒りの声がひびく。

「たつぐ、アンタのせいだ遅刻寸前じゃないー！」

「だから何回も謝ってるのに……」

シウン、とネギのアホ毛がしる。

朝、アスナからいいパンチを貰つたあと、ネチネチ言われてるので。ネギとしては見たくて見た訳ではないのだが、見た事実は変わりない。

「あーもう一ほんとアンタなんか泊めるんじゃなかつた！」

「なんや、仲いいなー二人共」

「「……ど」」が（です）？」「

「ほり、喧嘩するほど仲がえーで」

「……このかつて本当に天然というか、なんというか……」

「へー、日本にはそんな言葉があるんですね」

アスナはこのかの天然っぷりに呆れ、ネギは日本の文化に感心する。まあ、このこのかの言葉で喧嘩も終了し、三人は更に速度を上げた。

「じゃ、私達こいつちだから」

「またなネギ君」

「はい、教室で」

三人は遅刻せずに校門を潜り、下駄箱で分かれた。

「つてあれ? 届かない……」

が、早速問題が発生した。

大人用に作られている下駄箱に、ネギは届かないのだ。中学生でも楽に届くがネギは十歳、日本で言うなら小学四、五年生である。

背伸びをして頑張るが、どうしても届かない。

と、ネギの横合いから手が伸び、下駄箱の扉を開けた。

サラサラした金髪に青い目。

雪広あやかである。

「おせよハリヤーこますネギ先生。教室まで御案内しますわ」

「エ、エリヤ。おはよハリヤーこます、ここんちゅうさん

ネギはなんで困るのか気になつたが言わない」とした。正しい判断です。

「雪ムあやかドリヤーこます。昨晩はよく眠れましたか?」

「ええ。ちよつと早起きしてしまつて、起き、じゃなかつた。一度寝してしまつましたけど……」

「?」

冷や汗を垂らしながら雪ムネギを見て、あやかは首を傾げる。ネギはとてもよく寝れたのだ。初めての異国の就寝だつたのに、ただ田が早く覚めてしまい、身体強化魔法の練習をしながら走り、部屋に戻つた所で……

「うう……」

「どうしました?顔が真つ赤に……」

「だ、大丈夫です……」

しゃつかりしつかりバツチリ下着姿を脳に焼き付けているネギ先生だった。

そういうしている間に教室の前に立ち、顔を振つて少し冷やした後にガラツと開ける。

ちなみに、頭の上から振ってきた黒板消しはあやかがナイスキャッチ。ソレを見て舌打ちをした人物もいたが。

「き、起立ー」

ネギが教壇の上に立つと、田直であるのどかが号令をかける。

「氣をつけー、礼ー」

『おはよー』『おはよー』

「お、おはよー』『おはよー』

これだけの人数の年上の人には挨拶されたことはないため（というより十歳でそんな経験してる方がおかしい）ネギは多少どもりつつ、挨拶を返す。

「着席ー」

ガタガタと音を立て、教室の生徒達は全員着席する。

(しつかりやんなさいよー)

(わ、分かつてますよ。アスナさん)

アスナがそんなことを口パクで言つてきた気がしたのでネギも口パクで返す。

「じゃあ一時間田を始めます。テキスト76ページを開いてください

チョークとテキストを持つてネギが言つと、パラパラページを開く音が教室に満ちる。

全員が開き終つたのを確認し、ネギは英文を歩きながら読む。さすが英国人。英語の発音も完璧である。

「一今の所、誰かに訳してもらおうかなあ。えーと……」

ネギがそつと黙つて教室の生徒達を見ると、半分くらいが冷や汗を流しながら顔をそらす。

こういうのは何故か大概、わからない人に当たられる。

今回も、

「じゃあアスナさん」

「なつ、何で私に当てるのよつーー？」

顔を限界までそらし、ペン回しをしていたアスナは怒鳴って立ち上がる。

「えつ？だつて……」

ちなみに、ネギはその「顔をそらした奴はその問題がわからない」法則をもちろん知らない。だからアスナの反応も理解できず、

「フツーは日付けとか出席番号で決めるでしょーーー！」

「でもアスナさんア行じやないですか……」

「アスナは名前じゃん！」

「後、感謝の意味も込めて……」

「何の感謝よつーー？」

アスナが何故必至になつてゐるのかわからないネギは、アスナのどこか必至な態度に後ずさる。と、そこへ。

「要するに分からんのですわね、アスナさん」

「なつー!？」

あやかが見事に当てた。というかまるわかりだが。挑発するような口調であやかは続ける。

「では委員長のわたくしが代わりに……」

「わ、わかつたわよ訳すわよ」

アスナは意地を張つて冷や汗を垂らしながらも読み始める。

「ジョイソンが……花の上に落ち春が来た? ジョイソンとその花は……えと、高い木で食べたブランチで……骨が……百本? エーと……骨が……木の……」

この問題は意外と難しい部類に入るかも知れない。だが、所々絶対にあり得ない訳をしているのだが?

「アスナさん、英語苦手なんですか？」

ネギの問いかけにアスナが何か言つ前に、こいどばかりに周りがいい始めた。

「アスナは英語だけじゃなくて数学もダメですけど」

「国語も……」

「理科社会もネ」

「要するにバカなんですね」

あやかが結論を言つ。

確かにアスナはそれはそれはバカだった。

世の中、数学が異常によくて英語が絶望的な人間もいるが、アスナは勉強自体がダメだった。

「いいのは保健体育ぐらいで」

アハハハ

アスナは恥ずかしさの余り顔を真っ赤にする。穴があいたら入りた

い気分だ。

が、救いの手はあった。

「まあまあ、人間だれしも苦手な」とはありますし」

ネギ・スプリングフィールドである。

彼は続ける。

「大事なのは頑張るか頑張らないかですよ。僕だって運動は苦手でしたけど、頑張つたらなんとかなりましたし」

「ネギ . . . . .

いつの間にか静かになつた世界で、アスナはネギが天使に見えた。

が、

「そりいえばネギ先生はどれくらいで日本語覚えたの？」

「えつと、三週間です」

今度は十歳の子供に負けたという絶望感に打ちひしがれた。  
まあ、これはネギが天才すぎるだけだが。

時はたち、放課後。

「えー、という訳で2・Aのバカ五人衆が揃つたわけですが……」

「誰がバカレンジャーよ！？」

綾瀬夕映の言葉に、アスナは机を叩いて怒鳴る。

人と色は、

アスナがレッド、長瀬楓がブルー、佐々木まき絵がピンク、クーフエイがイエロー、そしてリーダーたる夕映がブラックである。ちなみに、確かにヒーロー戦隊で「メレンジャー」という、色も同じでブラックがリーダーの物がある。まあ詳しくはグーグル先生へ。

今、何故この五人+後方に一人いるのかというと、ネギが居残り授業をしよう！と、しづな先生から貰つた居残りさんリストを見ながらどこにハルナ

ら思つたからだ。

「いーのよ別に勉強なんかできなくても。この学校エスカレーター式だから高校までは行けるのよ」

「うう……あつー。」

アスナの態度に呻くが、いい名案が思いついた。

「でも、アスナさんの英語の成績が悪いとタカミチも悲しむだらうなー」

「うう……わ、わかったわよ。やればいーんでしょ、やれば

罰が悪そうな顔でしぶしぶやると言つたアスナに、ネギは心の中でガツツポーズ。

ネギ、人のやる氣を出す方法を一つ覚えた。

一時間後、

ズーンと黒い陰がアスナの周りに浮かんでいるように見えるくらい、アスナは落ち込んでいた。あとちょっとでダークサイドに落ちてしまいそうだ。

ネギの教卓の上には小テストの用紙があつた。大量に。ネギのこの補習を抜ける条件は一つ。十点満点の小テストで六点以上とること。

最初はマジメにやれば超できる子の夕映が九点で合格。のどかハルナとともに帰つていった。

残りの四人は三人が三点から四点、そしてアスナが一点で不合格。

それからネギがポイントを教え、再テスト。

クーフェイ、楓が八点で合格。クーフェイは日本語も覚えないといけないから大変らしい。

そしてまき絵も六点で合格。

アスナ、一点。

と、いうわけで教える、テスト、教える、テスト、教える、テストの繰り返し。  
結果は……

ネギは筋肉がガチガチに固まつた笑顔で机の上を見る。

「三点、二点、一点、四点、三点、一点……」

問題の内容はたいして変えてないのに、どうして点数が上がつたり下がつたりするのだろうか？

よつぽどのバカでも一時間もやれば、六点くらい取れるはずなのに。

窓の外は夕暮れに染まり、カラスがアホーアホーと鳴いていた。

「もういいわよ……私バカなんだし……」

「ああっ！アスナさん諦めないでえ！」

ダークフィールドを展開していたアスナはボソッと自虐する。ネギは必至に励まそうとするが、

「おーい、調子はどうだい？ネギ君。おっ、やつぱり例によつてアスナ君かー」

「たつ……ー？」

とどめを刺す一言。言つたのはダンディ高畠。

「あんまりネギ先生を困らせちゃだめだぞー、アスナ君」

「た、高畠先生……いえつ、あのつ、これは……」

「じゃあ頑張つてね、二人とも」

アスナが何か言う前に、タカミチはハツハツハツと爽やかな笑顔を浮かべながら歩いて行ってしまった。

「……」

「あ、あの……スナさん、そ、その……『気にしないで』……」

傷心し、プルプル震えるアスナに、恐る恐る話しかけるネギ。顔は青ざめ、冷や汗が垂れまくる。

だが、ネギのその勇氣といつもこの本当の魔法は、

「うわあああーん……」

「ああー…？」

逆効果だった。

アスナはノートなどを手に持ったまま教室を出て走るー叫びながら走る。

「まつてアスナさんつて早ツ！？」

ネギが廊下を見るとアスナはオリンピック新記録じゃねえの?つて  
いつくら一のスピードで走っていた。

ネギは慌てて身体強化の魔法をかけ、杖を持って走る。

自動車なみの速度による、鬼ごっこが始まった。

「はあはあ . . . . .

「せえせえ . . . . .

麻帆良学園にある巨大な湖。

その浜辺で二人は息を整えていた。

「ア、アンタ……私の足に追いつくんて、なかなか……やるわね

……」

「ぼ、僕……戦闘用身体強化魔法……使ってたんですけど……」

ネギが使った魔法は「戦いの歌」。白兵戦用の魔法である。つまり、これを使わないと追いつけないアスナの身体能力は異常だ。

「あーもうっ！」

だけど体力には限界がある用で。ドサッ！とアスナは浜辺に腰を下ろし、ネギと背中合わせになる。

「アンタ本ッ当にしつここわね……言つとくけど、変なご機嫌取りはお断りだからね」

「そ、そんなあ……ぼ、僕はアスナさんの先生ですし……それに困っている人を助けるのがマギスティル・マギの仕事ですから」

「…………ふうん」

チラッとアスナはネギの顔を見る。

疑問に思つたことを、聞いてみた。

「ねえ、何でそんなに頑張るのよアンタ」

「えつ？」

「何でそんなに一生懸命なの?まだ子供なのに……」

「……それは」

ネギはちょっと迷うそぶりを見せるが、構わず告げた。

「実は僕、憧れている人がいるんです」

ネギは杖を強く握り締める。

「ただ、みんなはその人は死んだんだって言います。……でも」

杖を、立てる。

「でも僕にはあの人人が死んだとは思えない。あの人は、千の魔法を使いこなす最強の魔法使い『サウザンド・マスター』。世界を旅しながら、沢山の不幸な人達を救ってるんです」

ネギは杖を見ながら思い出す。

六年前の、あの雪の日のことを。

『お前がネギか……大きくなつたな……』

『IJの杖をやる。俺の形見だ』

『元気に育て、幸せになー。』

「だから」

ネギは空を見ながら囁つ。

「僕はあの人のような立派な魔法使いになりたいんです。そうすれば、この広い世界の何処かであの人、父さんに会えるかも知れない」

そつ空を見ながら囁つ姿は、とても十歳には見えなかつた。  
アスナはそのネギの顔を見て、

「…………んー…………」

くしゃくしゃ髪を搔き回し、

「あーもーーわかったわかったわよーやればいいんでしょ勉強ー。」

「えつ？」

ネギは思わずアスナをまじまじと見つめる。  
照れくさいのか、アスナはノートに乱暴に書き込みながら早口で言  
う。

「あんたがその、マギなんとかになるためには今の先生の仕事を上  
手くやんなきゃいけないんでしょ？協力するわよ」

「あ……ありがとう！アスナさん！」

「わっ…っつくなバカ！」

夜、

「よしうけたー見なれこよーコレで完璧ーせいかつたと採点しなさ  
いよー」

「は、はい！」

寮の部屋でアスナが自信満々に差し出したテストを受け取る。結果は、三点、五点、四点、二点。

「あつ……」

「なつ……ー？」

「やっぱアスナ勉強はダメやなー」

まあ、全体的に点数は上がったところ」とことで。まだまだバカだが。  
頑張れ、アスナ。

少年の夢を知るお姫様。  
自分が関わっていることを知らず。



## 第三話・居残り補習と魔法少年の夢（後書き）

さて、今回はストーリーがズレています。

理由は惚れ薬騒動とお風呂イベントを無くしたから。

パワーアップしているネギじゃどうとも無理なんですね……

では。

## 第四話・最終課題+図書館島

はう、えっと、あの……今日は私です……  
ネギ先生は魔法使いとして頑張つてましたー……。

それを横で支え続けたのがアスナさんで……  
私は、そんなアスナさんが羨ましくて……

魔法先生ネギま!「英雄の息子と黄昏の姫御子の物語」

第四話・最終課題+図書館島

太陽が麻帆良学園をくっきりと照らし出し、陽光が空気を温める。  
その春らしい暖かさにあぐびをする人は多い。  
そして、遅刻しないために全力疾走している人達も例外では無くて、

「ふわ～あ……そろそろあつたかくなってきたなー」

「モーですねこのかわん」

ノンビリと微笑むのかにネギは笑顔で同意する。  
春の訪れをまつたりと感じたいが、

「ひひあー喋つてないでサッサと走りなさよー。」

遅刻寸前の登校時には無理な話。

アスナはノンビリしていた二人に声をかけ急かす。

ダッシュで走る（このかはローラスケートで）三人に周りから声がかかった。

「ネギ君おっはよー！」

「やつほー？ ネギ先生」

「あ、佐々木さんに和泉さん！」

「おはよー」

まき絵に和泉亜子である。

二人は三人に並走し、走り始める。

「この間のドッヂボール面白かったねー」

「スカッとしたわ。ネギ君すごいなー」

「それほどでも……」

話に出て来たドッヂボールというのは、ネギが麻帆良に来て一週間経った時のこと。

高校生と喧嘩代わりにドッヂボールすることになったのだ。

最終的に結果は2 - Aの圧勝。  
で、負け惜しみに向こうのリーダーがアスナにボールをぶつけようとしたのだが、

「まあか片手で取つて握りつぶすなんてなー」

「本当。アンタの方が私よりバカ力じゃない」

「あっははは……」

実は魔法使ってましたとは言えないネギだった。

六時間目終了後。

廊下を日直の明石祐奈、椎名桜子と一緒に歩いていると、ネギはふとあることに気がついた。

「……何か他のクラスの皆をヒヤッとしてますねー」

そう、他のクラスの人達の様子が少し違うのだ。何やら集中しているというか、一生懸命というか……

「あーそだね。そもそも中等部の期末テストが近いから」

「来週の月曜からだよ、ネギ君」

「へー学期末テストですか。大変だつて、ウチもそうなのでは！？」

二人から何げなしに伝えられた衝撃情報に、ネギは面食らつ。

ちなみに、何故ネギが知らないかというとテストを作る人でも無いし、言わなくてもいいだろと周りの先生が判断してためだ。

「あはは、うちの学校エスカレーター式だからあんまり関係無いんだ」

「特にウチはずーっと学年最下位だけど大丈夫大丈夫」

「はううつー？」

(大丈夫じゃないでしょあんまり～！？)

ネギは心の中で呟く。

「…………？あのお花みたいなトロワリーは？」

「あー、あれはテストで学年トップになつたクラスが貰えるんだよ」

「へー……」

金ピカに光るトロワリーを見ながらネギはビックリにかするべさなのか  
なー、と迷う。

「でもなー、魔法を使つちやん訳じも…………」

「ネギ先生」

「あ、はい？じずな先生？」

後ろから何か焦つた様子で現れたじずな先生に、ネギは首を傾げる。

「あの、学園長先生がコレをあなたこつて」

そつまつて手渡された物を見て、ネギは思わず大きな声が出る。

「えつ！？僕への最終課題！？」

手紙には最終課題、と書かれていた。

ネギの脳内をドリフトン退治だの、魔法一百個取得だの大変な課題が  
よぎる。

恐る恐るネギが手紙を開けて見るとそこには……

次の期末試験で二・Aが最下位脱出できたら正式な先生にしてあげ  
る。

難しくないよう見えて、実は最ツ高に厳しい課題の内容が書かれ  
ていた。

「終わった……」

ネギはボソッと教卓の前で呟く。

まだホームルームまで少し時間があるため生徒達は互いに喋ったり遊んだりしていた。

その中でネギだけが唯一暗い。

理由は勿論課題。

要するに、

最下位脱出はほぼ绝望的。

ネギのクラスには学年トップクラスが三人もいる。

だが、だがしかし。あのバカレンジャーが悪すぎた。

トップをマイナスにしてしまい、しかも全体的に低い人が多い。

「うー……いや、諦めたらだめだね。よし！」

ネギは氣合いを入れ、ホームルームを始めるつむをいい始めた。

?

「と、いう訳でホームルームは大勉強会にしようと思います！」

「いや、何がという訳なのよ」

アスナのシッ「!!」が入るがネギはスルー。  
時間は無駄には出来ない。もうテストはすぐなのだから。

「はーい？提案提案

「はーい！権益行使」

ネギは桜子が手をあげたので、名前を呼ぶ。

「では……お題は『英単語野球拳』がいいこと思こまーすっ……」

おお～～～

「うふ、頑丈ん！？」

周りが意見に賛成し、はしゃぎたてる。  
勿論、あやかの言葉を聞く生徒はない。

そしてネギは、

「じゃあそれで行きましょ！」

「えー？」

野球拳という物をサッパリ知らなかつた。生徒の自主性に任せるのもいいが、内容くらい聞いた方がいいのは？

「ちょっとネギ！アンタ野球拳つて何か知つてんのー？」

「じゃ、僕テキストの問題コピーしてきますね！」

アスナが言うが聞かず、ネギは教室を出て行つてしまつた。

次にネギが今日、教室で見たのは2つ。  
一つはアスナと他バカレンジャーの下着姿（アスナまき絵はブラジャー無し）。

もう一つは真っ赤に顔が染まつたアスナから放たれたストレートパンチである。

ちなみに直撃のさじの効果音はメゴツ。

「……なあ、アスナわん？これビーフこいつじだつてばよ~」

「いや、その……」

麻帆良学園にある図書館島の地下深く。地底図書館と呼ばれる場所がある。

そこは何故か壁が光り、水が溢れ、本好きにとってはまさに楽園といつ幻の図書館。

そんな図書館の浜辺にて、バカレンジャー+Jのかは正座をせられていた。

ネギ？

アスナを下から覗きこむようにガシツけてます。

「ねえ？アスナさん。俺わあ、学年最下位脱出したこしさ、わせ

たいから問題集作つてたんですよ。英語だけじゃなくて全教科。

国数理社英ぜーんぶ」

「ネ、ネギ君。一人称が変わつて「シャーラップ」「はい」

まき絵がいい終える前にネギは一言で黙らせる。

まき絵が小声で「こんなのはネギ君じやない……」と呟つが、周りの人間全員同意である。

特に至近距離で睨まれてるアスナ。

「なのには……何やつてんの？ 魔法の本？」

「はい……」

「バカじやねえのテメヒラ！？自分で勉強しろやボケえ！雷食らわして脳みそ活性化させてやるおかあ！？」

「「「「「「」、「めんなれ——こ——。」「」「」「」「」

今回ばかりはネギの怒りももつともだつた。

アスナ達は魔法の本を求めて夜にここに来た。

理由はもちろん、学力アップのため。

それを職員室で問題を作つていたネギが知つたのは学園長からの電話があつたからだ。

2-Aの誰かが魔法の本を手に入れるために図書館に居ると聞か、

アスナに寮にいない人間を聞こうとしたら「只今、電源を切つてい  
るか、電波の届かない場所に居ます」。

もしやと思いこのか。

「只今、電源を切つていろか、電波の（ｒｙ

今、麻帆良で信頼している人間ベスト2と4に裏切られたネギはぶ  
ち切れ、図書館島のトラップ軍団を魔法で突破。

現在にいたる。

「反省してりんですかあー？やつぱ一億＼の電気喰らつてみますか  
あ！？」

「「「「「本当に」「めんなさい…もつしません…」「」「」「」

ダークネギによる説教はそれから三十分もあった。

「全く……でも、特別授業の方がいいかも知れませんね」

痺れたーなどと言つて横たわる人を見ながらネギは咳く。

学園長先生のアドバイスでバカレンジャーメンバーを集中的に鍛えたら?ということになつたのだ。

ネギの不在は何とかしてくれるらしい。

「んっ?」

ネギは気がついた。

アスナが左肩を庇つていることに。

「あー……アスナさん、こっちに来て下さい」

「えつ……?」

アスナは露骨に嫌な表情をするが、ネギは構わず右手を引っ張つて行く。

他の人達が近くにいないことを再度確認し、物陰でネギは唱える。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル。汝が為にコピテル王の恩窮あれ。治療」

ネギがかざした杖が光り、アスナの腕を包む。

「あれ？少しそくなつたかも？」

「はい、治療の魔法です。応急処置程度ですが」

ネギは一ヶ口笑いながら呟つ。

アスナは思つた。

(ナウよね。わたくしのネギはあれよあれ。氣の迷いよ。そいつナウ)

実はまた説教じゃないかとビクビクしていたアスナだった。

三日後。

「重量オーバーデス」

「い、いやあああああー！？」

無慈悲なエレベーターの機械音声がなった。  
状況をダイジェストに説明すると、

アスナが水浴びをしているのをネギ目撃。拳がヒット。

アスナ達、小学生からやり直しかといつデマを信じてた。アスナ、  
傷のせいでネギに倒れ込む。

遠くで悲鳴が聞こえ、行つてみるとそこにはゴーレムが魔法の本を  
持つていた。

バカレンジャーご自慢の身体能力で魔法の本を奪つて逃げる。

滝の裏口に非常口発見。問題を解き、中へ。

問題をときながら螺旋階段を登る登る一直通エレベーターに乗り込  
む。

重量オーバーデス 今こそ。

「……僕が降りますー皆さんは先に地上へ帰つて下さいー！」

ネギはエレベーターを飛び降り、杖の布を一気に解く。

「えつーー?」

「ネギ君ーー?」

「ちょっとネギーー?」

アスナが一際大きい声を上げるが、ネギは杖をクルクル器用に回しながら言ひ。

「大丈夫ですよ、アスナさん。ゴーレムの一体や二体に遅れはとりません。本を持って明日の期末を受けてください」

ニッコリ笑つてアスナにそう言い終え、ネギは高速回転する杖を両手に持ち、身を屈める。

「……フツー」

前に飛び出そうと地面を蹴ー

「ぐえつーー?」

「…」

後ろにいきなり引っ張られ、ネギはエレベーターの中へ。誰かに後ろから抱き締められる。

「アスナさん！？」

ネギは手の主を見て驚く。

「あんたが先生になれるかどうかの期末試験でしょ？あんたがいいまま試験受けてもしょーがないでしょーが」

「えつ……？」

アスナの言葉に思わず惚けるネギ。アスナは半分呆れながら続けた。

「ガキのくせにカツコつけても一バカなんだから…」

「で、でもこのままじゃあの『コーレム』に……」

ネギは正気に戻り、アスナに訴えるが、アスナは腕を思いつきり振りかぶって、

「リーラーさんのもー。」

「そ、それはー!?」

ブンッ!

アスナの右手から放たれたのは魔法の本。  
魔法の本は回転しながら「コーレムに大命中。  
重量オーバーではなくなり、エレベーターの扉も閉まった。

こうして、ネギ達は図書館島を脱出したのである。

時は飛んで十七時間後。

ネギはトボトボと駅までの道のりを歩いていた。

理由は単純明快。

だめだったのだ。課題失敗。

故郷へと帰らなければならない。

そう思いつつ歩いてた所で、

「ネギー！」

大きな女性の声が聞こえた。

ネギはそちらを向く。

五つ先で立ち止まつたその人物はアスナだった。  
息を荒くし、ネギを見る。

「アスナさん……」

「「「、「ゴメン！本当に「ゴメン！私達のせいだ最終課題落ちちゃつて  
……魔法の本を捨てたのも私だし……」

アスナの謝罪に首を振りながらネギは少し悲しそうに告げる。

「いえ、そんなことないです。誰のせいでも無いですよ」

「ネギ……」

「魔法の本なんかで受かつてもダメですし……結局僕が教師として未熟だったんです」

ネギはやつれて背中を向けようとすると、アスナが叫ぶ。

「ちよ、ちよっとー？そんなに簡単にあきらめちゃうのー？マギ……なんとかになってサウザンなんとかって言われてる、お父さんを探すんじゃなかつたのー？」

ネギは悲しそうな顔をして、黙つて後ろを向き、駆け出した。

「バカ！」

が、後ろからガシッと抱き締められる。  
ネギが驚いている間に、アスナは続ける。  
自分が言いたいことを率直に。

「行っちゃダメって言つてるでしょーーそりや、最初はガキでバカなことばかりするから怒つたけど……私なんかよりちゃんと目的持つて頑張ってるから感心してたんだよーなのに……」

「ア……アスナさん……」

思いにもよらないアスナの言葉に、ネギは少し顔を赤べかる。  
そこへ、

「ま、待つてーネギ君ーっ！」

「ネギ坊主ー！」

「み、みなさん！？」

で、既に色々言われた後、学園長がバカやつてたのが判明。  
結果、

「なんど、2・Aがトックリじゃー！」

「や、やったーーーー！」

盛代な歓声が響き、みんなは喜びあつ。  
ソレを見ながらネギは泣いていた。

「あれ？ ネギ泣いてるの？」

「な、泣いてないですよー。」

そつ言つてネギは田をこする。

嬉し泣きなど、ネギの人生の中で初めてだった。

「ははは、よかつたね。ネギ。……お」

ポンッとアスナの手がネギの頭に置かれ、くしゃっと撫でる。

「どうあえず新学期からもよろしくね、ネギ」

「は、はいっ…… よろしくお願ひします、アスナさん！」

アスナは笑顔で言い、ネギも笑顔で答えた。

その後テンションが上がりすぎた2・Aの生徒達がネギを胴上げしたのは、全くの余談だ。

お姫さまと主人公の絆は深まり、  
物語は加速してゆく。

**第四話・最終課題 + 図書館島（後書き）**

次からエヴァ編です。

## 第五話・桜通りの吸血鬼

ネギ先生はよく頑張つてました。

今思つと、十歳の子供に出来る事ではなかつたですね。

エヴァンジロリンさんとも戦つたのですから、感心するばかりです。

魔法先生ネギま！「英雄の息子と黄面の姫御子の物語」

第五話・桜通りの吸血鬼

麻帆良に向かう電車の中、ネギはアスナのあとと一緒に乗っていた。ガタンカダンと、電車独特の効果音がなる。

「いよいよ新学期、私達も中3ねー」

「はーい

近くに掴む物が無い為、アスナの腕を掴んでいるネギは答える。

「これからも一年よろしくな、ネギ君」

「はい、がんばりまつわわわー!？」

電車が急カーブしたのか、感性が働きネギは押し潰される。

「このかとアスナの胸に顔を挟まれて。

「「」、「」のHロガキイ……！」

「ちよ、今のは事故！事故ですってばー！」

「まあまあアスナ落ち着きい！」

真っ赤な顔で右拳を振るおうとしたアスナだが、このかの言葉により動きが止まる。

確かに事故だし、周りの迷惑にもなる。

「……次やつたら承知しないわよ」

「はい……それにしても、春休みあつといふ間でしたね」

ネギはホソヒシツツ言つた。

春休みは本当にあつといふ間だった。

終業式後はパーティで千雨と仲良くななり、学園内を双子と回り、あやかの家へアスナとこのかと行き、最終日の昨日はこのかと一緒に鬼ごっこ。ハチャメチャだが楽しい春休みだった。

「あつ、そういうえばネギ君。パートナー探しはもうしなくてええの

？」

「あははは……探すにしてもまだずつと先の」とですよ」

パートナー探しといつのは、昨日来たネギの姉、ネカネの手紙の内容がテタラメに変化して噂になり、ネギが追いかけられたのだ。ちなみに本当はパートナーは結婚相手のことではなく、「魔法使いマジック・マギの従者」のことである。

「…………ござとなつたら…………」

「?なんか言つた?」

「いえ、何でもありません」のかせん

「……」

「次は麻帆良学園中央です」

電車内に駅を告げる音声が鳴り響き、中にいる人がドアの近くによつてゆく。

「んつ。ネギ、遅れるんじゃないわよ?」

「ネギ君遅れんでな」

「あははは……ちょっと厳しいかもです……」

ブシューと音が鳴り、ドアが開いた。

一斉に大量の生徒達が走り出す。

ネギは余りの人波にスタートダッシュをミスってしまったやうな。

「三年一」

「A組一」

「「「「「「「「ネギ先生一」」」」」」」」」

(バカどもが……)

(アホばっかです……)

あるドラマの出だしセリフのパクリをしながら歓声が上がる。クラスの後方にツツコウを心でしている人が一人いるが。

教室のプレートも取り替えられ、外は桜の花びらが舞う。

「えと、改めまして。三年A組担任になりましたネギ・スプリングフィールドです。これから来年の三月まで的一年間、よろしくお願ひします」

「はーい!」

「よろしく?」

ネギの言葉に元気に返す生徒達。クラスを見渡し、ネギは思いを巡らせる。

(この一年間で三十一人と仲良くなれるかなあ……)

まだ話していない生徒達もいるなと思うしている所で、

(一ツ！？)

鋭い視線を感じた。

前にもネギはこの視線を感じたことがある。

そう、タカミチに組み手をしてもらった時のよつな……

顔を視線が来た方に素早く向けるとその先には、一番列の後ろの生徒がいた。

何気なしにこちらを見るだけの筈なのに、背筋がゾクッとなる。

慌てて視線を持っていた名簿に落とした。

(あの娘は……出席番号一十六番、ヒヴァンジエリン・A・K・マ

クダウルさん……あれ？)

ネギはそこまで考えて、聞き覚えのある名前に冷や汗を垂らす。

「どーしたのよネギ？身体測定つてよ？」

「あ、いえ、少し考え方を……」

(まさか、ね……)

アスナは少しおかしいネギの態度に首を傾げるだけだった。

身体測定中、アスナはむー？と、首を捻つて呻いていた。

「どうかしたのかなネギ……」

「アスナどうしたん？」

「いや、ネギがさ。何か様子が変だつたから」

「うーん、何か悩みでもあるんぢやう？」

「だらうだらじねって、アホな噂で騒ぐのはいいけどちやんと並びな  
れいよ」

アスナはそこまで言つて桜通りの吸血鬼の噂で盛り上がるメンバ  
ーに言った。

今はいつの間にかこの手によつてチュパカブラと言つ珍妙な生  
物が描かれていた。

「そんな」と言つてアスナもむりと怖いんでしょ~

「あんなのが日本に居る訳がな……」

ふと、言葉の途中でアスナは考え込んでしまう。  
もしかしてネギ（魔法使い）が居るんだから吸血鬼ぐらいいるんじ  
やないか?と。

「ゲッ、まじでシャレになら無いわね……」

誰にも気づかれぬよつ、ボソッと呟いたアスナの言葉に反応する者  
は……

「そのとおりだな、神楽坂明日菜」

「え?」

いた。

アスナがそちらを向くと居たのは見事な金色の髪に青い目を持つ、少女。

エヴァンジル・A・K・マクダウルだった。

「ウワサの吸血鬼はお前のような元氣でイキのいい女が好きらしい。十分気をつけのことだ……」

「え……！？あ、はあ……」

エヴァンジルの言葉に、ただアスナは返した。

身体測定中にネギはまき絵が倒れていたという話を聞き、クラス

のメンバーと保健室にいた。

「ビ、ビーしたんですねまき絵さん！？」

「何か桜通りで寝ているところを見つかったらしいのよ」

「桜通りで……？」

ネギは周りがまき絵が倒れていた理由の意見を全く聞いてなかつた。  
何故なら、

（わざかだけど、確かに魔力の残照を感じる……）

まき絵から魔力の残照を感じたからだ。

分かりやすく言つなら、「魔力を使われた感じがする」とこいつこと  
だ。

ネギはうーんと悩みじみ、考える。

（僕の他にも魔法使いが？でも何でまき絵さんを？僕の知っている  
限りじゃ、まき絵さんは魔法のことを知らない一般の人なんだけど  
……）

「ちよつとネギ。何黙つちゃつてゐるのよ？」

「あ、ちょうど良かつた。アスナさん、桜通り関係で噂かにかかりませんか？」

ネギの突然の問いかけにアスナは答える。

「噂つて、桜通りの吸血鬼とか？」

「ツーそれか……いや、でも……」

可能性は、高い。  
ネギは決心した。

夜、桜通りを一人で歩く少女がいた。  
宮崎のどかである。  
他の四人は用事で別だ。

風が桜の木の間を駆け抜け、音を立てる。

「か、風強いですねー……ちょっと怖いっかなー」

やつまつて一歩を踏み出しが、

「……？」

不自然に風が止んだ。

立ち止まって不思議に思った瞬間、何かを感じ、のどかはふりかえる。

電灯の上に黒一色の何かが立っていた。

「ひ……」

「一十七番西湖のビガカ……悪いけど少しだけその血を分けてもらつよ」

バサァーとマントをはためかせ、それはのどかに向かつて飛んだ。

「キヤアアアアツー。」

のどかは悲鳴を上げ、ショックのせいで氣絶する。

そしてソレが覆い被さりつとした所で、

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル！」

「来たか」

道の向こうからネギは杖にまたがつたまま詠唱を続ける。

「風の精霊十一人、捕縛となりて、敵を捕まえろ！魔力の射手・戒めの風矢！」

詠唱が終わると同時に、ネギの右手から風の矢が放たれた。

「ほう？氷盾……」

ソレから投げられた何かが宙を舞い、爆発する。

そして大きな氷の盾が生まれ、ネギの手から放たれた捕縛の風矢を全て弾き返した。

盛大な効果音と、衝撃波による煙が舞う。

「くつ！？」

ネギは一旦のどかを抱え、怪我が無いか確認した後、後ろに風の魔法でゆっくりと下ろし、前を見る。

煙が晴れ、魔女が使つよつた三角帽子が脱げ、空を飛ぶ。

「驚いたぞ。凄まじい魔力だな……」

「やつぱり、貴方ですか……」

ネギはその声を聞き、苦い顔で言つ。出来れば当たつて欲しく無かつた。  
相手は、金色の長い髪に、青い瞳。  
彼女は面白おかしそうな顔で、

「私のことを知つていたか、先生……いや、ネギ・スプリングフィールド」

「当たつて欲しく無かつたですけどね……」

心の中で思つたことを、ネギは口に出す。

「英雄サウザンドマスターに倒されたと言われている、究極の闇の魔法使い」

ネギの杖を持つ手に冷や汗が伝わる。

「異名は数しれず。真祖の吸血鬼、『不死の魔法使い』（マガ・ノス  
フェラトウ）……」

ニヤッと彼女は笑った。

「闇の福音……！」  
ダーウ・エヴァンジェル

彼女は、魔法界に名を轟かす、悪の大魔法使い。

エヴァンジェリン・アタナシア・キティ・マクダウェルだった。

戦いが始まる。

少年の本当の意味での初めての戦いが。

第五話・桜通りの吸血鬼（後書き）

短くてすみません……

自分はどれだけちっぽけな存在なんだろうと、いつも思う。

早く大人になりたいって思つ。

力が欲しいから。

誰も、傷つけたくないから。

魔法先生ネギま！「英雄の息子と黄昏の姫御子の物語」

第六話・闇の魔法使いとの初戦

手についた血を舐めとり、エヴァは不適に微笑む。

対してネギは神経を目の前に集中し、攻撃に備えていた。

「……ふつー氷結・武装解除！！」

「風花・武装解除！！」

エヴァが突然投げた試験管とフラスコの液体が空中でぶつかって混ざり、そこから氷の衝撃波がはじける。

対するネギは全てを花びらにする突風でそれに対向した。

二人の真ん中で凍てつく風と突風がぶつかり合い、更に大きな衝撃波が周りに吹き荒れる。

「やるじゃないか」

「……」

エヴァの称讃の声を無視し、ネギは考え続ける。

相手を分析し、適切な戦術をはじくだそうするために、頭を働かせる。

だが、後ろからの足音に、ネギの思考は中断された。

「何や今の音ーー?」

「あつネギーー!」

「アスナさんにこのかさんー?」

「フフツ」

ネギが驚いて後ろを向いた間に、先程の衝撃波による煙に紛れる工  
ヴァ。

それを見てネギは一人に慌てて言つ。

「ア、アスナさんこのかさん! 富崎さんを頼みます! 僕は犯人を追  
いますので、心配ないですから先に帰つてください!」

「え、ちょっとネギ君……」

「じゃあ!」

質問する暇をとらず、ネギは「戦いの歌」と風系の身体補助魔法を  
発動。

一気に工ヴァが消えた方向へと走る。

通常じゃ絶対にあり得ない速度で走ったおかげか、

「いたー。」

「ー。」

かなり早い段階で見つかられた。

「はやー。やつは坊やは風が得意だつたな

そう言つてヒヅアは歩道橋の上でイキナリ左方向に移動し、手すりを踏みつけて空へと踊り出た。

マントがはためき、空を飛行する。

「空を杖や籌を使わずに飛んだー？浮遊術？いや、マントかー。」

ネギはそう判断しながら、空を杖にまたがつて飛び。  
ネギは頭を使って戦うタイプだ。

戦術を組み立て、一つ一つ考える。

(でも、おかしい)

ネギは後ろを追いかけながら、一番の疑問を考える。

（魔力が少なすぎる。魔法の発動にいちいち魔法薬を使つてゐし、いくらなんでもおかしい）

ネギは答えを出した。

（つまり、エヴァンジエリンさんには今なんらかの魔法がかかっていて、魔力が抑えられている！それならー）

子供のネギにも、勝つチャンスはある。

「エヴァンジエリンさんー悪いですが捕まえさせてもらひます！」

「ふつ、やれるものならなー！」

そのセリフを合図に、二人とも一気にスピードを上げ、空を翔る。三十メートル程離れた所で、ネギは詠唱を開始した。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル！風精召喚ー！剣を執る戦友！」

ネギの詠唱とともに周りにネギの形をした様々な風の戦士が出てくる。

その数合計八体。

「捕まえて！」

ネギの命令とともに、一気にエヴァに接近する。

対するエヴァは冷静に魔法薬を投げ、氷を生み出して一體一體を潰す。が、

「かかつた！」

「……？ハツ！？」

エヴァは一瞬疑問に思つて理解するが、遅い。

風の中位精靈によるロッピーは氷を食らつた瞬間、爆散した。その爆風により、エヴァの動きが完璧に止まる。

「風花」

しかも、

「武装解除！」

ネギは爆風に紛れて接近していた。

エヴァは咄嗟に手をかざすが、完璧にレジストできずマントの部分  
モリが飛び立ち、魔法薬も全て消え去る。

実質、エヴァの魔法は無くなつたと言つてもいいだろう。

エヴァは自由落下して建物の屋根に着地する。  
ネギもそれに合わせて屋根に着地した。

「風系補助呪文を掛け合わせたか。器用なマネをする」

「ちょっと薄着のエヴァから皿をそりしながらネギは宣言した。

「これで捕縛すれば僕の勝ちですね。大人しく何でこんなことをし  
たのか、言つてもらいます」

エヴァはそれを見て、

「……坊や、中々やるよつだが……私を舐めるなよっ」

「何を一グツ！？」

突然、ネギは首に腕を回され宙にうかされる。  
これは、田の前のエヴァがやつていることでは無い。

(新手、か！)

「……解、放」

「……！」

そのネギの言葉に、首に手を回していた人間は一気に後ろに飛びすぐる。

ネギの周りに光球が九つ浮かび、ネギの周囲を駆け巡った後、虚空へと焼き消えた。

「ほつ、遅延呪文か。なるほど、意味無き油断では無かつたわけだ」

「けほつけほつ……くつー？」

ネギは咳き込んだ後、飛んでエヴァの隣に立つた人を見る。  
見覚えのある人物だった。

「さて、紹介しよう。私のパートナー、3-A出席番号10番、II  
ニステル・マギの絡繰茶々丸だ」

「な、ミニニステル・マギー？」

ネギは驚愕する。

まさかエヴァンジロリンに術者がいるとは。  
だが、気づく。

エヴァンジロリンの異名の一つ。

「人形使い（ドールマスター）……！」

「そうだ。まつ、茶々丸はロボでハイテクってやつらしいがな

マズイ。

ネギの思考をその言葉のみが埋める。

一対二。どっちが有利かはまる分かりだ。

しかも茶々丸は接近戦が出来る。

ネギも接近戦は出来るが、所詮「距離を取るための戦い方」でしか  
ない。

ネギがもつとも得意とするのが中遠距離戦闘なのだ。  
今の距離は五メートル。簡単に詰められる距離だ。

「……くつー」

呻くネギを見てエヴァは言つ。

「まあよく坊やは頑張つたよ。だが、私の呪いを解くために血を寄越してもらおうか……！」

エヴァの隣りにいた茶々丸が飛ぶ。

飛んで来た茶々丸の右手は防げたものの、左手は首に回され絞められた。

「グッ……の、呪い……？それが貴方の力を封じている……」

「ああ、そうだよ……」

なんだか体を振るわせながら言い出したエヴァを見て、ネギはデジヤウを感じた。特にアスナ関係で。

「私はお前の父、つまりサウザンドマスターに敗れて以来魔力も极限まで封じられ！もう十五年間もあの教室で日本のノー天気な女子中学性と一緒に勉強させられてるんだよ！」

ガツクンガツクンネギの胸ぐらを掴んで揺さぶりながらエヴァは理不尽な怒りをぶつける。  
ネギは必須に弁解した。

「い、いやー僕知りませんしー僕に当たれても……」

そんなネギのセリフを無視し、エヴァはネギの首に顔を近付けてゆく。

「ここのバカげた呪いを解くために、死ぬまで血を吸わせて貰うぞ……」

「なつー?くつ……」

ネギはもがくが、一向に茶々丸の拘束から抜け出せない。エヴァの唇がネギの首に触れ、血を吸い始めた。

「あつ、くう……」

「んつ、んつ」

血を吸われる度に、思考能力がどんどん低下してゆく。ネギは朦朧となつていき、

(「こで、終わりか……」)

諦めてしまった。  
だが、

「……………」

天はネギを見捨てなかつた。

突然の乱入者の足に茶々丸とエヴァンジエリンは蹴られ、

「あつ……」

「はふううー？」

面白いくらいに吹つ飛んだ。

ズザザアアア！と顔面ヘッドスライディングをしてエヴァは頬を抑

えながら起き上がる。

そこにいたのは、

「き、貴様は神楽坂明日菜！」

「あつ、あれー？あんた達クラスの……！」

アスナの問いに答えず、エヴァは、

「よ、よくも私の顔を足蹴にしてくれたな神楽坂明日菜…………お、覚えておけよ…………！」

どつかの三下悪党のセリフみたいなのを涙目で言つて、茶々丸と一緒に屋根から飛び降りた。

アスナは慌てて屋根の淵に立つて下を見るが、二人の姿は無い。

「…………八階よ…………？あつーネギ！大丈夫！？」

「す、すみません。アスナさん……」

心配するアスナの声に、ネギは立ち上がりながら返す。  
若干よろよろしているが、ネギは概ね無事だった。ただちょっと貧血気味だが。

(……迷惑、かけちやつたな)

「ひた走りへぐるアスナを見てネギは思ひ。

次じあは、と。

戦いは幕を開け、

少年は自分の誓いを信じ進む。

アイツは変なやつだった。

ガキのくせに大人びてて力があつて。

でも頑固で泣き虫でガキっぽくて。

どこか、惹かれていた。

魔法先生ネギま！「英雄の息子と黄昏の姫御子の物語」

第七話・戦いまでの間

「おはよー、起きました……」

「ちょ、ネギ! ? アンタちゃんと寝たの! ? .」

朝、部屋にネギの元気が無い声が響いた。

アスナはネギの余りにも元気の無い姿に驚き尋ねる。

ネギの畠の下にはクマができ、服はよれよれ。どこかの病人のようだ。

「寝ましたよ……一時間」

「ガキは普通もつと寝るー」

ネギのとんでも告白にアスナはビックリ仰天。ハハハッと笑つて居るネギがとても心配になつた。

この後寝てしまつたネギをアスナはおぶつて登校することになる。

(吸血鬼用の魔法なんか習得してないしなあ。例え覚えたとしても、

そうネギは口に出せずにため息を吐く。

(はあー、まさかあのヒヴァンジエリンと戦うことになるなんて…)

アスナの背中で寝ていて、気がついたら教室だったという体験をしたネギは、授業中のクラスを見渡す。

最後尾にいる筈のヒヴァは居なかつた。茶々丸はいたが。

(ヒヴァンジエリンちゃんはサボリ、かな?)

そんな干の雷を超えるかも知れない大魔法が何の準備も無しに出来るはずも無い）

もちろん、対吸血鬼用の魔法というのは存在する。

だが、大規模なタイプばかりだし、様々な条件が必要な場合もある。  
しかも、

（確実に吸血鬼を 殺す ための魔法だしね……）

そう。殺すための魔法だから手加減などできないのだ。

（ヒヴァンジエリンさんは敵である前に生徒だし、なんとか話し合いで解決できたらいいんだけど……）

「ネギ先生」

（戦いになつたらマズイ。パートナーがいるだけでこここまで戦いにくくなるなんて）

「ネギ先生？」

（まだ奥の手を隠してゐるかも知れない。相手は歴戦の魔法使い、どう対策を練る……？）

「ネギ！」

「はわつー? なんですかアスナさん! ?」

「なんですか、じゃないわよ。もう英文読み終わってるわよ」

ネギは文句を言つが、アスナが和泉をしたため頬んでいた英文音  
読が終わつたのだと気がついた。

「す、すみません和泉さん! 」

「あはは、気にせんでええよネギ先生」

苦笑している和泉にネギは頭を下げる。  
和泉はふと、ネギをジロジロ見て聞いてみた。

「なあ、ネギ先生。あんま寝てないみたいやけど、どれくらい寝た  
ん? 」

「えつと、登校中もアスナさんのおかげで寝られたので……一時間  
半、かな? 」

「　　」 時間半ー? 「　　」 「　　」 「　　」 「　　」

朝のアスナと同じリアクションを取る生徒達。

極一部の生徒を覗いて普通は最低でも六時間は寝る。

「ちょ、ネギ君大丈夫なの！？」

「はははっ、大丈夫ですよ。ちょっと頭がクラクラするだけで」

「それは大丈夫とは言わないわよ！」

ネギの？ 気な言葉にアスナが突っ込む。周囲もウンウンと頷く。

「どうしたのネギ君？ アスナになんかされたの？」

「まあアスナさん…ネギ先生とまたかあんなことやあんなことを…

…！」

「アンタじゃないんだからそんな」としないわよ…」

「アスナさんは関係ないですよ。ただちょっと新学期早々問題が…

…」

ネギは睨み合ひを始めた二人にさりげなく注意を向ける。

「あれ？ もしかしてパートナー候補の悩み？」

「えつー？ そうなのー？」

「ネギ君やうなのーー？」

「えっ！？いや、違……」

ふと、言いかけて気づく。

相手にパートナーがいるのが問題なら……

（いや、ダメだ！それだけは……）

「違いますよ

ネギが心で否定し、言い切った瞬間、授業の終了を告げるチャイム  
が鳴り響いた。

「むう……」

「なーにやつてんのよ、ネギ」

「えつと、エヴァンジエリンさんへの対策を考えています」

夜、テーブルの上に紙を広げ何かを書き込みながらネギはアスナに答える。

アスナは対策?と首をかしげながらネギの上から覗き込む。紙には複雑な魔法陣が描かれていた。

「何これ?」

「魔法の術式の一つです。まあ、役に立つかは分かりませんけど一応……」

ちなみに今このかは居ない。  
大浴場にでも行っているのだろいう。  
アスナは心配そうに尋ねる。

「アンタ大丈夫なの?」

「だ、大丈夫ですよ……たぶん」

ネギは冷や汗を流しながら言つ。

正直に言つて真っ正面からぶつかつた場合、勝ち田は無いに等しい。ネギは推測の一つとして「エヴァンジェリンは満月の夜じやないと力を発揮出来ないのでは無いか?」と思つてゐる。

更に女子生徒達の血を吸つことも関係している筈だ。

「時間は恐らくまだあります。今のうちに何か手を……」

「よひ、ネギの兄貴い！」

と、突然ネギに声がかかつた。

今部屋にはネギとアスナの二人しか居ないはずなのに、だ。

二人は顔を上げ、周囲をキヨロキヨロする。

「な、なに今の声？」

「イリードゥサア

「あつ」

ネギは声がしたほう……床を向き、そこにいた人物いや、生物に気がついた。

「カモ君！」

「へへっ、兄貴！久しぶりだな！」

それは真っ白なイタチ、ではなくオゴジヨだった。  
正し、普通に喋っているが。

アスナはそれを見て、

「お、オゴジヨが喋った……？」

まあ、当然の反応をした。

「へー、五年前にねえ

「そーなんすよ」

あれから始まつたのはカモによるネギとの出会いの話。アスナはそれを聞いてほおーと関心していた。だが突然、ネギは疑いの表情でカモに尋ねる。

「所でカモ君……？まさかとは思つけど、また下着ドロでもしたんじゃないだろうね……？」

「い、いやーそんな事はしてません！」

「またつてことはやつたことがあんのね……」

ガクガク震え出したカモの言葉に、アスナはため息をつく。

だがカモはそれ所では無かつた。脳裏に浮かぶ光景はただ一つ。一年前、下着ドロをした時の……

『なあ？少しお話しようか力モオ？大丈夫だ、百分の九十九殺しで済ませてやる』

『ほりほらー死ぬ氣で避けねえと本当に死ぬぜえ！？俺をもつと楽しませろおー！』

「ガタガタブルブル」

「あ、あれ力モ君！？」

「ちょ、なんか凄く震えてるわよー！？」

雷怖い雷怖い。

力モは十分くらいこう咳き続けた。

「で、結局あなたは何しに来たのよ？」

「俺つちはネギの兄貴を助けるために来たんである。兄貴、全然進  
んでないみたいですねえ」

「え？ 何が？」

心当たりが無く、ネギは戸惑う。  
カモはチツチツと舌を鳴らしながら、

「パートナーのことですよパートナー！」

そう、なんか欲望が混じった顔でドーンーと言つた。

少年はどうするのか、  
まだそれは少年自身にも分からない。

傷つけ合うのは嫌いだ。

だって、傷つけるということは自分の大切な者が傷つく可能性があるってことだから。

だったら、誰も近付けなければいい。

そうすればー

魔法先生ネギま！「英雄の息子と黄昏の姫御子の物語」

第八話・機械人形との会合

カモが来てから一日後、朝起きたネギが見たのはアスナに追いかけ回されるカモの姿だった。

眼をすりながらネギは寝ぼけた状態で近くにいたこのかに挨拶。

「おはよー」「やあこます……」

「おはよーな、ネギ君。朝スクランブルエッグと田玉焼きどっちがええ?」

「じゃあスクランブルエッグでお願いします……」

「はいなー」

(ギヤアーー? 姐さんギブギブー内臓が! 内臓が飛びでグエツ!?)

カモがアスナに握りつぶされかけているのをスルーしながら、ネギはパジャマを脱いで着替え始めた。

カモはネギの使い魔扱いになつた。

使い魔として自分なりにネギの役に立とうとするこのオコジヨ精霊  
は、意外と人の感情に鋭い。

そして、ネギの態度から不安を感じたのも彼の長所なのだろう。

「どーした兄貴？」

「うん、ちょっとね……」

ネギは周囲を見ながら返すが、感じたことがある気配を背中に感じ、  
振り返る。

「やあ、久しぶりだなネギ先生?」

「……」

そこに居たのは言わずとも知れた2人組、エヴァンジェリンに茶々  
丸だった。

「今日もサボらせてもらひつよ。先生が担任になつてから色々と楽になつた」

「くつ……」

近くに居て会話に入れないアスナを横目に見つつ、ネギは魔力を集めるが、

「勝ち田はあるのか？学校内では争わない方がお互いのためだと思うが」

「ぐつ……」

「ああ、言つておくがタカミチやジジイ（学園長）に助けを求めるなどとは考へるなよ？また生徒達を襲われたくなればな」

簡単に見破られ、ネギは思念詠唱を中断する。

エヴァン杰リーンは不適に笑いながら身をひるがえしあつて行つた。茶々丸もペコリと一礼し、後について行く。

「……ふう

その背中が見えなくなつた所で、ネギは安堵の息を吐く。

神経がガシガシ削られて行く感覚は気持ちのいいものでは無い。

「ちよ、ネギ？」

「大丈夫ですよアスナさん。ちょっと疲れただけで」

「なんなんすかアイツは！？タダもんじやないみたいだしよお」

アスナがネギの力の抜けた体を支え、カモはネギに説明を求めた。

（説明中）

「く、国へ帰らせましていただきます」

「待て！」

どこから取り出したのか帽子とカバンを持つて何処かに行こうとした力モをガシッと、尻尾を掴んで止めるアスナ。

「しつかし、ネギの兄貴よく生き残つたな。真祖の吸血鬼つていやあ最強クラスの化けもんじやねえか」

「つていうか、そんなにスゴイの？」

ネタだつたのかネギにすぐ話しかける力モに、アスナが尋ねる。

「そうすね……ゲームに例えると最初の敵がいきなりラスボスクラス、みたいな」

「うわー……勝てるの？」

力モの例えでネギの危機的状況を完璧に理解出来たアスナは、ネギに問いかけた。ネギはむづかしい顔をしながらも頷く。

「はい。可能性は低いですがゼロじゃないです。呪いのせいでエヴァンジエリンさんは弱つてますし、茶々丸さんさえ何とかすれば…」

「ふふふつ、それなりいい作戦があるぜー。」

力モが何やら飛び上がりながら叫ぶ。

その力モを怪しいと思いつつ、二人は続きを待つ。

力モの提案は、

「ネギの兄貴が仮契約して茶々丸つてやつを一対一でボコれば「却下」

言い切る前に、ネギに却下された。

理由は一人は敵の前に自分の生徒だから。

「茶々丸さん」

「……ネギ先生」

廃墟でネコに餌をやつていた茶々丸は、その言葉に振り向いた。  
そこに居たのは肩にオコジヨを乗せたネギに、隣にネギの杖を持つ  
て立つアスナだった。

「少し、お話をしたいんですけどいいですか？」

「……構いません」

茶々丸はそう言つて、ふと疑問に思つた。

（なんでお一方の眼に泣いた後があるのでしょうか？）

茶々丸は知らなかつた。

自分のドラマのような行動を見ていたネギとアスナが感動して泣いてたなど。

ど」にでもあるような喫茶店。

そのボックス席に三人と一匹はいた。ネギとアスナは同じソファーに腰掛け、机の上にはカモ、向かいのソファーには茶々丸が座っていた。

沈黙を破るように、ネギは尋ね始める。

「えつと、エヴァンジエリンさんが僕を狙うこと何ですが、やつぱり呪いを解くことが目的なんですね？」

「はい。正確には登校地獄の呪いです」

「えーと何？ その呪い？」

「昔不登校の生徒に痺れを切らした教師が編み出した呪いで、効力は「必ず学校に登校しなければならなくなる」、です」

「……えつ？ そんなしょぼそつなの？」

茶々丸の言葉に、ラスボスクラスのやつにかかってる呪いとか凄いんだろうなー、と思っていたアスナはテンションが下がった。

「でも、そんな呪いなら自力で解けるのでは……？」

ネギが疑問に思う。

対したことのないような呪いを、ビリしてエヴァンジエリン程の術者が解けないのか？

「それはサウザントマスターの膨大な魔力によつて、しかも出鱈田にかけられたためのよつです」

「……つまり？」

「呪いが変質してしまい、マスターでも解けないような呪いになつてしまつた、ということです」

「……ダメ、意味わからんない」

「姐さん、これくらい分かるひづせ」

難しいのは苦手なのよー、とアスナはテーブルに突つ伏す。それにつつこむカモ。

が、ネギはちゃんと分かつていた。

「……のために僕の血が必要、ですか……」

「はい。……一つお聞きしてもいいでしょうか？」

茶々丸から尋ねられるなど思つていなかつたため、一瞬ネギは惚けるが、笑顔で頷いた。

茶々丸は尋ねた。

「神楽坂アスナさんはネギ先生のパートナーなのでしょうか？」

「違いますっ……！」

ダンッ！…とネギは手を机に叩きつけ、立ち上がる。

他の人の目線など気にせず、焦った表情でネギは茶々丸を睨む。そこに先程までの笑顔はカケラも残っていない。

アスナはいきなり怒鳴ったネギについていけず、カモは苦虫を噛み潰したような苦い顔をしていた。

「……すみません。でも、アスナさんは魔法を知ってるだけの一般の人です」

ネギは落ち着いたのか、席に座り茶々丸にハッキリと告げる。  
アスナは不思議に思った。

ネギはこんなにハッキリ物を言う人間だつたか？と。

「そう、ですか」

茶々丸は、

「ネギ先生は優しいのですね」

そう、最後に言った。

次の日、朝起きたら部屋にはアスナ一人だった。

いや正確にはもう一匹。

「おはようつす姉さん」

「うーん……あれ? このかとネギは?」

アスナは朝起きて、部屋にはカモと自分だけだと気がつく。

「このか姉さんは買い物に行つたポイゼ。ネギの兄貴は山だ」

「山あ?」

アスナは意味が分からず言い返す。

カモは補足説明を始めた。

「対エヴァンジエル用に少し鍛えるそつだぜ。魔法使つから山で  
やるみてえだ。明日には帰るつてよ」

「ふーん」

パパッと着替え終わったアスナは納得した。  
ネギが居ない。カモだけ。

「ねえ、一つ聞いていい?」

「おれたちに答えりれる」とならいいぜ」

「じゃあさ、昨日から疑問に思つてたことなんだけど……」

「アイツ、なんで私をこの事に関わらせたくないって思つてるの?」

ガサガサ！

ネギは足りないと言う。  
まだ、自分の望む力を手に入れられてないと。  
彼が求めるのは一

「でも、まだまだだな……」

ネギは息を吐き、木によりかかる。  
さすがに魔力を使いすぎたかも知れない。

「ふう……」

「くつー?く、クマー?」

草を搔き分けで近付いてくる音に、慌ててネギは立ち上がる。

だんだん足音が近付いて……

「おや?ネギ坊主で?」「れいんか」

「……はつ?」

突然出て来た自分のクラスの生徒に、拍子抜けた声を出した。

それからネギが帰ったのは夜の九時だった。

「ただいまですー」

「お帰りつてアンタなんか服ボロボロよ?」

「ちょっと色々あって . . . . . でもおかげで学べました」

「はあ?」

ネギは笑う。

アスナは心配するばかり。

決戦は、着実に近付いていた。

?

いよいよ戦いが始まる。

勝利の女神はどちらに微笑むのか。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1651m/>

魔法先生ネギま！「英雄の息子と黄昏の姫御子の物語」

2010年10月10日15時15分発行